

石田波郷の句碑を巡る⑥ ^{ちょうらくじ} ～長楽寺と五十崎邸～

校長 玉井 啓二

松山市内には、本校の卒業生で昭和を代表する俳人の石田波郷の句碑が数基設置されています。本年度は、それらを巡り、そこに記されている波郷の俳句を鑑賞してきました。今回はその第6回目で、西垣生町の長楽寺と余戸中2丁目の五十崎邸（波郷が俳句の師と仰いだ五十崎古郷の邸宅）に設置されている波郷の句碑を紹介します。

下の2枚の写真のうち、上の方が長楽寺、下の方が五十崎邸に設置されている句碑です。これらの句碑に共通して記されているのが次の俳句です。

かんつばき

寒椿 つひに一日のふところ手

石田波郷

この俳句の季語は「寒椿」。「椿」は春の季語ですが、冬に咲く椿は「寒椿」とも「冬椿」とも呼ばれ、冬の季語になります。特に雪が積もった後に咲く真っ赤な寒椿は、寒さに耐えて凜としていているように感じます。ところで、この句の中の「ふところ手」も冬の季語です。冬に和服で過ごしている時に、寒さのために手を懐に入れて温めることを表しています。ですから、この句は一見すると季重なりになりますが、ここでは「寒椿」の方を主におくべきで、「ふところ手」は何か考え事をしている様子を表していると解釈するのがよさそうです。そうすると、凜と咲く寒椿と呼応して、長い時間をかけて深く思案している様子が一層鮮やかに想像できるからです。

この句は、波郷の第二句集『風切』に収められています。『風切』には、波郷が26歳から30歳までの作品が収められていますので、この句は波郷が出征する前に作られたものとなります。この頃の波郷は、句誌「鶴」の主宰として精力的に句作に励み、多くの俳人と俳句談義を交わしていたので、この句のように一日中ふところ手をして思案していたのは、きっと俳句のことだったと想像されます。波郷の俳句に取り組む姿勢の厳しさと集中力の強さを彷彿とさせる句です。

沈思黙考を長時間続ける波郷の様子が表れたこの句から、私は本校の校訓「考える」を想起しました。本校の校訓「考える」は、1782年に当時の伊予郡垣生村今出に生まれ、伊予絋の創始者となった鍵谷カナの探究心や創造力にあやかって決められたものと伝わっています。ですから、この句は、本校で学んだ波郷が校訓「考える」を体現しているように感じられるのです。垣生小学校の皆さんにも、この俳句と本校の校訓「考える」を関連付けて味わってほしいと思います。

さて、今回で「石田波郷の句碑を巡る」は最終回になります。私が今月末で定年退職を迎えるためです。私は、昨年度と本年度の二年間を本校で勤務し、垣生が俳句をはじめとした文化の薫り高い地区であることや、本校もその文化を伝統的に大切にしていることを実感していました。そして、「このような文化の発展に、微力ながら役に立ちたい。」との一心で、本校のホームページにおいて、昨年度は本校の「俳句の小径」の句碑を紹介し、本年度は松山市内に設置されている波郷の句碑を紹介してきました。文化の発展に十分な貢献はできなかったと反省していますが、これらの作業を通して、私は垣生地区や本校に対する愛着を強く抱くことができました。垣生で幸福な時間を過ごすことができ、垣生で出会った皆様と俳句に心より感謝しています。今後も、垣生地区や本校に根差している文化が、垣生の子供たちの手でますます発展していくことを祈念しつつ、筆をおくことにします。二年間、お世話になりました。ありがとうございました。

雁（かりがね）や残るものみな美しき 石田波郷

【参考】俳句の聖地「愛媛・松山」へ吟行をいざなうサイト | 五・七・五のこころ旅 吟行ナビえひめ



長楽寺（中央が波郷の句）



五十崎邸（左が波郷の句。右は五十崎古郷の句「寝待月灯の色に似て出でにけり」）